



こんにちは。アーツ前橋の情報誌「アンドアーツ」です。これから年に何回か、美術館とその周辺で行われる活動や見どころなどをお届けしていきます。第1号でまずご紹介したいのは、このユニークな建築について。いったいどこがユニークなのか、書ききれないと困るので、もうここから始めてしましますが、例えば外観の表面に空いた丸い穴、下より上のほうが小さくなっていること、知ってました？ なんだか上に向かって昇っていきかんじがしますよね。その理由はページをめくって見てください。このほかにも、美術館に足を運んで探してみたくなるようなポイントをいろいろと紹介しているほか、建築家のインタビュー、建築と深い関わりのある常設作品も掲載しています。キーワードは「デパート」、「散歩道」、そして「つながる」です。

Contents

Feature

みんなの記憶を大切に。[建築家・水谷俊博インタビュー]
「点と点をつなぐ線」のルールをデザイン [西澤明洋]

Works

コミッションワーク：照屋勇賢《静のアリア》

Column

アーティストコラム：照屋勇賢

Report

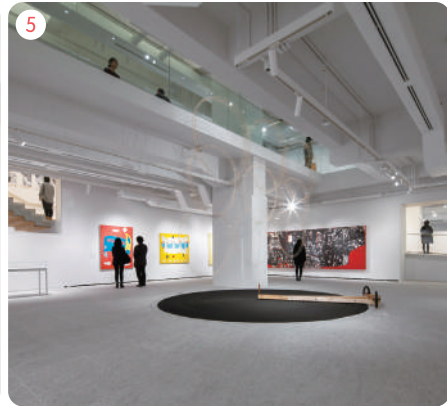
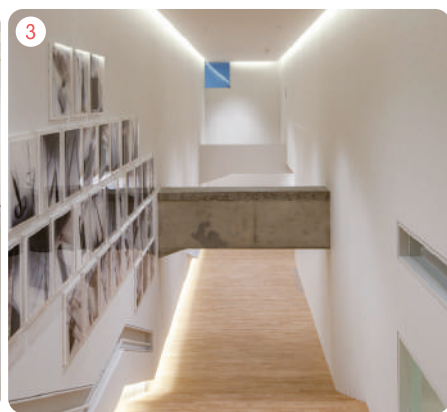
「音色を奏でる絵画たち」展 & ツアー

Information

2015年3～9月の展覧会スケジュール

1

まちとつながる散歩道のような美術館建築



まちなかでひととき強い存在感を放つ、変わった形の白い建物。近づいて見ると、丸い穴のたくさんあいたパンチングメタルが、ゆるやかなカーブを描く外壁をヴェールのように覆っています。ガラス越しに見えるショップやカフェはなんだか楽しげ。ぶらぶらと散歩するように入ってみれば、そこはもう美術館内。アーツ前橋の建築はまちとつながっているのです。

エントランスから1階の展示室へ進むと、その真ん中には地下の展示室を見下ろせる吹き抜けが。地下へと続く「プロムナード」は、階段に踊り場、大きな梁もあって表情豊かな、まさに散歩道のような趣です。また、大小さまざまな大きさの展示室には、あちらこちらに窓がついていて、向こう側の作品や人の気配が

伝わってきます。

実は、アーツ前橋が位置するのは、かつて西武系のデパートだった建物。その面影を随所に残していることが、変化に富んだ構成につながっているのです。例えば、外観は元の形を活かして覆い、イメージを新たにしたもので、展示室の吹き抜けはエスカレーターを撤去した跡。プロムナードの部分は1階の床をはがして梁をそのまま残しています。

まちに直接つながり、場の記憶に時を超えてつながる建築。そこでアートを介して人々をつなげる美術館。さまざまな表情をもつ要素が関係し合って、いつだって唯一無二の体験をつくり出してくれる、そんな建物なのです。

1.夜の外観。アルミ板と外壁の間の上部にLEDのライン照明がついています。丸い穴は下から上に向かって小さくして、上昇感を表現。「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」をコンセプトに活動するアーツ前橋の成長を意味しています。2.1階と地下の展示室をつなぐ吹き抜け部分には、かつてエスカレーターがありました。3.プロムナードの2本の梁は、地下に向かって手前がグレーで奥が白。日常世界から非日常世界へ移っていくことを表しています。4.展示室の窓は展示スペースになることも。5.複数の窓や吹き抜けによってつながりのある開放的な空間に。

2

みんなの記憶を大切に。[建築家・水谷俊博インタビュー]

建物の再利用、まちなかという立地、数々の条件を魅力として活かしたアーツ前橋の建築。その設計を手がけた水谷俊博さんに、当初の思い、そして今の思いを聞きました。

——このユニークな設計は、デパートから美術館へのコンバージョン(用途変更)という前提条件によるところが大きいと思いますが、特に注意したことはありますか？

市民のみなさんが日常的に親しんできた建物の記憶を、大切にしたいと考えました。随所に「あえて残す」デザインを徹底しながら新しい表情をつくることで、愛着と刺激のあるまちの顔になればと。市街地中心部にある既存商業施設をコンバージョンで本格的な美術館に生まれ変わらせるというプロジェクトは全国でも先駆的で、そのプログラム自体の面白さはありましたね。

——“散歩道”というアイデアもコンペ(複数の設計者による競技)で決め手になったのではないのでしょうか。

市街地のど真ん中という立地条件は、魅力であると同時に、どう活かせるかが課題でした。美術館って普通、大きな公園の中にあたり、まちなかにあっても広場などのオープンスペースがとられることが多くて、それがなくダイレクトにまちとつながっているというのは珍しい。美術館として機能的にはある程度閉じなければならない側面もあるのですが、さまざまな意味でどこまで開いていけるかがポイントでした。一方で美術館に対する敷居が高いというイメージがある。市民の方々を含めてまちと美術館をどうつなげていくかを考え、発想しました。

——開館して約1年半が経ちますが、これまでの展覧会で、建物の使い方として印象的だったことはありますか？

企画ごとに建築の特徴を汲み取って活かしてくれているのを見ると、うれしいですね。なかでもプロムナードは展覧会によっていろんな見せ方がされているので毎回来しめです。普通の美術館だとホワイトキューブのプレーンな部屋で展示をすることが多いですが、アーツ前橋では展示室の大きさがまちまちだったり、意外なところに柱があったり、あちこちに窓があいていたり、天井のダクトが露出していたり……さまざまな「ひっかかり」のようなものがあります。それを取り込んで利用してもらっても面白いだろうし、逆にとらわれすぎることなく自由に、表現の可能性を拓けてもらえたらと思います。

——前橋のまちの変化をどう見えていますか？

はじめ前橋駅に降り立った時、予想以上に元気がないと感じ、美術館の建築がシンボリック的存在としてにぎわいをつくるひとつのきっかけになればと思いました。アーツ前橋の開館後、近くの商店街にアートスポットが生まれたり、地元出身の作家が戻ってきて活動したりと、少しずつ新たな姿を見せ始めていて、波及効果はあるようです。全国の地方都市の中心市街地が衰退傾向にあるなかで、今後ほかの地域に示す事例にもなったと思います。

——水谷さんにとってアーツ前橋とは？

おかげさまで、私の最高傑作です！



水谷俊博(みずたにとしひろ)

建築家・武蔵野大学教授

1970年神戸市生まれ。京都大学大学院工学研究科建築学専攻修了。株式会社佐藤総合計画を経て、2004年水谷俊博建築設計事務所設立。受賞歴多数。著書に『環境デザインの試行』(2007年武蔵野大学出版 共編)など。今年7~9月の大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015に出展予定。アーツ前橋はパートナーの水谷玲子さんとともに水谷俊博建築設計事務所として設計。インテリアデザインのミリメーター、照明の岩井達弥光景デザイン等とチームを組んで進めた。アーツ前橋周辺で気に入っているのは、広瀬川沿いや飲屋街・呑竜仲店の景観。

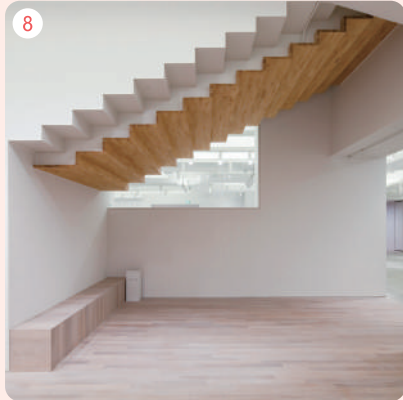
「点と点をつなぐ線」のルールをデザイン[西澤明洋]

こんなところにも遊びゴコロが！
注目したい建築デザインのポイント

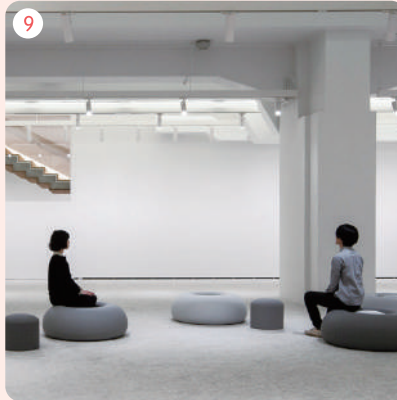
カフェのカウンター「ROBSON COFFEE ARTS MAEBASHI」のカウンターには車輪が付いていて、開けたり閉めたりできます。



空調の吹き出し口 ショップやカフェなどの交流スペースでは、天井にある空調の吹き出し口が丸くデザインされています。



プロムナード下の休憩スペース 地下の展示室にはプロムナードの階段裏を活用した休憩スペースが。まるで階段の下にも階段があるようです。



オリジナルのソファ 建築家の水谷俊博さんがデザインしたソファ。真ん中のスツール部分とドーナツ型の部分に分離できます。

展覧会ごとにちがっておもしろい！
「プロムナード」での展示いろいろ

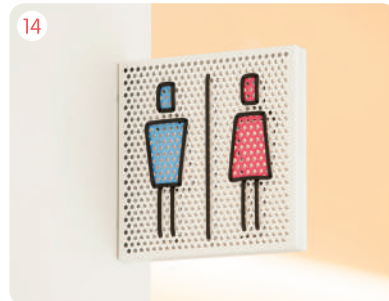
「白川昌生 **ダダ、ダダ、ダー** 地域に生きる想像☆の力」(2014年3月15日～6月15日)では、白川さんのコンセプトの元、黄色く塗装されました。そしてこの先には真っ黄色の空間が待ち受けていたのです。



「プレイヤーズ — 遊びからはじまるアート展」(2014年7月5日～9月15日)に現れた巨大な飛行機は、青秀祐さんがたくさん紙飛行機を吊るして作ったもの。階段を上り下りしていろんな角度から楽しめました。



「服の記憶 — 私の服は誰のもの？」(2014年10月10日～2015年1月13日)で服を糸の状態にまで解き戻し、元の配列のまま結びあげた平野薫さんの作品。天井から床まで2階分の高さをフルに使った展示です。



白いパンチングメタルの穴に黒いゴムチューブを通すことで文字や絵を描いた案内板。思わず触れてみたくなりませんか？ アーツ前橋のサインやロゴのデザインを手がけたのは、ブランディング・デザイナーの西澤明洋さん。「美術を中心にジャンルが多様であること、参加形態が多様であること、コラボレーションによって新たなものが生まれること」というアーツ前橋の特徴から、テーマは「点と点をつなぐ線」に。モチーフとなったのは、外観のパンチングメタルの丸い穴です。ひとつひとつの点は、人、まち、アートなどの要素を表し、それらをつなぐ線はアーツ前橋の活動を表しています。

「これはいわば「ルールのデザイン」であり、このルールから作られるデザインが、美術館で積極的にみなさんに使われて、そこからさらにまちにまで浸透していくと面白いと考えました」と西澤さん。人々の参加を促す、自由な余地のあるデザインなのです。

西澤明洋 (にしざわ あきひろ)

ブランディングデザイナー

1976年滋賀県生まれ。株式会社エイトブランディングデザイン代表。「ブランディングデザインで日本を元気にする」というコンセプトのもと、企業のブランド開発、商品開発、店舗開発など幅広いジャンルでのデザイン活動を行っている。「フォーカスRPCD®」という独自のデザイン開発手法により、リサーチからブランニング、コンセプト開発まで含めた、一貫性のあるブランディングデザインを数多く手がける。著書に『ブランドをデザインする！』(2011年 パイ インターナショナル)など。

アーツ前橋の建築・デザイン・照明 受賞歴

建築

全建賞(一般社団法人全日本建築技術協会)
DSA空間デザイン賞2014 優秀賞(一般社団法人日本空間デザイン協会)
JCDデザインアワード2014 銀賞(一般社団法人日本商環境デザイン協会)
2014年度グッドデザイン賞ベスト100(公益財団法人日本デザイン振興会)
第24回BELCA賞・ベストリフォーム部門(公益社団法人ロングライフビル推進協会)

デザイン

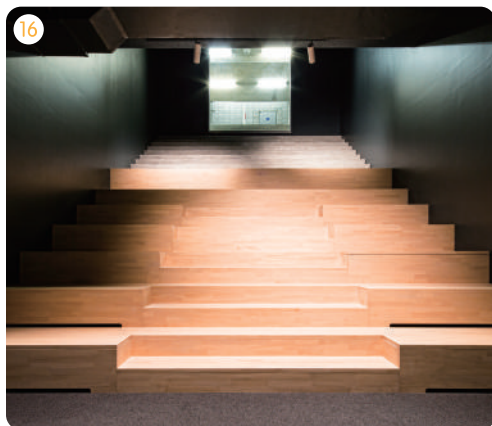
ONE SHOW DESIGN 2014 Merit賞
第48回SDA賞 サインデザイン優秀賞(公益社団法人日本サインデザイン協会)
iFデザイン賞2015 iF Gold Award 2015

照明

省エネ・照明デザインアワード 公共施設・総合施設部門(省エネ・照明デザインアワード審査委員会)
照明普及賞(一般社団法人照明学会)

2015.3.1現在

照屋勇賢《静のアリア》



地下の回廊のような展示スペースの脇に、扉があります。開けて中に入ってみると、そこにあるのは木の階段。さらにガラスの壁の向こうには、コンクリートの階段が続いています。木の階段に腰を下ろし、傍らにある小さな本のページをめくると、「あなたの静けさを守ります」といった言葉や絵が。思いがけず見つけた小部屋で、ちょっとひと休みするとしましょう。

2013年にアーツ前橋の建築に合わせ、コミッションワーク(恒久展示)として照屋勇賢さんが制作した《静のアリア》。この作品が位置するギャラリー0は、かつて非常階段として利用されていた空間です。建築家の水谷俊博さんによれば、「元デパートということで幅の広い非常階段があったのですが、法規的につぶしていいスペースとなったので、下約半分を解体して奥の壁をガラスにし、向こう側に残った階段上部が見える展示室にしました」。そこで照屋さんが考えたのが、非常時と通常時を隣接させる空間演出でした。

ここでは、2011年3月27日に群馬音楽センターで行われた群馬交響楽団による演奏会の音声が発時



(14:00～、16:00～)に再生されます。東日本大震災発生の日後、特別に演奏されたバッハの「G線上のアリア」、その後拍手の代わりに被災者の冥福を祈って行われた黙祷。観客と演奏者によって生み出された静けさが、この空間でよみがえります。ちなみに、音声の再生内容は約20分間。はじめはガラスの向こう側で、その後同じものがガラスのこちら側で、計40分間かかるのですが、非常空間の音はくぐもって聴き取りにくく、通常空間からは分りにくいです。

隠し部屋のような空間に籠って、あなたにとって、社会にとって、アートや美術館がどんな役割を果たしているのか、思いを巡らせてみませんか。

16.床には絨毯が。音声の再生は真空管アンプを使った機材で行われ、わずかな物音までも含めた当時の空気が伝わってきます。

17.《静のアリア》のために制作された本の内容は、「緊急時のアート、緊急時の美術館」について。文章は照屋勇賢さんとアーツ前橋の住友文彦館長によって書かれました。

※鑑賞可能日は、地下の展示室を使用した展覧会の会期中の開館日のみとなります。

照屋勇賢 | TERUYA Yûken

「アーティストのおすすめ○○」を聞くこのコラム。今回は「Works」で作品を紹介した照屋勇賢さんに、特集にからめて「おすすめの『空間』」と題して語ってもらいました。新しい公共空間のお話です。

僕の出身の地元自治体による文化振興事業で、工芸家のための事業育成、指導を目的にした企画、展覧会を担当職員から聞いている時、ふと、アプリとスマートフォン(スマホ)の環境のことを思っていました。スマホ購入者対象の調査では、インターネットの利用に続いて、「アプリが使える」というのがスマホ人気の理由、と報告がありました。スマホ競争によって、過去の厳しい審査よりも、アプリ開発に自由度が増し、個人でもアプリ開発から販売に参加できるプラットフォームの自由化がスマホ市場を一気に拡大したということです。またITビジネスの成功の秘訣は、情報や機能が集まるプラットフォームと、アップルのデザインにも見られるように、メーカーの主体性を利用者に譲ったプレゼンテーションだとも言えます。そして画面いっぱいの広い自由な空間をスマホ/タブレットに提供しました。iPhoneの電源を切った後、周りを見ると、公共施設の公園や広場といった主体性と公共性の交差点が、スマホのプラットフォームととても近い関係に感じます。

公共施設がスマホの成功に続くチャンスはあると想像します。フリーインターネット、ベンチやテーブル、地元事業の発想の激励。自治体主体の文化振興や指導から、専門職のリーダーシップのためのプラットフォーム作りへ。そして、個人の専門的知恵と経験は、新アプリのようにモチベーションのエネルギーになると期待します。アーツ前橋のカフェのコーヒーマシンがとても美味しいのは、地元で磨かれた味がそのプラットフォームで活かされているからだと思っています。そしてそのコーヒーマシンを飲んでいるのもまた、いっぱいの広い自由な広場と樹の陰で活動する人々です。

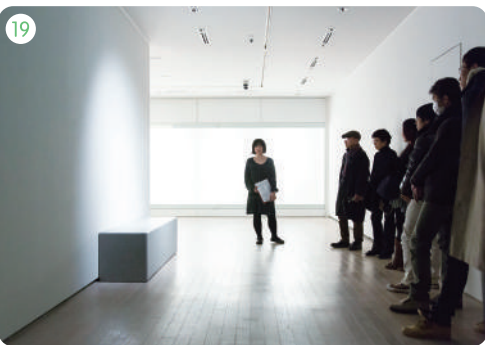
1973年沖縄県生まれ、ニューヨーク在住。1996年に多摩美術大学絵画科卒業、2001年ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ修士課程修了。2005年に、「Greater New York 2005」(MoMA PS1)、「横浜トリエンナーレ」等で注目を集め、国内外の美術館に収蔵される。主な展覧会に「アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(2006、クイーンズランド・アート・ギャラリー)、「Shapes of Space」(2007、グッゲンハイム美術館)、「愛についての100の物語」(2009、金沢21世紀美術館)、第4回モスクワ・ビエンナーレ(2011)、第18回シドニー・ビエンナーレ(2012)。

「音色を奏でる絵画たち」展&ツアー



絵画に存在する音楽って、聴いたことはありますか？ 1月24日から3月10日にかけて開催された展覧会「音色を奏でる絵画たち」ー 県内コレクションで迎える近代絵画の歩み」には、音の調和を絵画で目指したパウル・クレー、フォト・デッサンでモノクロのリズムを表現した瑛九、自然界の形なきものを描いた中村節也といった作家たちの、聴覚にも訴えかけられるような作品がズラリ。「これまで紹介していなかった所蔵作品を、県内の美術館や個人のコレクションとあわせて選びました。絵画を観て思い浮かぶ音を頭のなかで奏でながら鑑賞してみると面白いですよ」と学芸員の今井朋さん。

2月14・15・21・22日には、詩や音楽、演劇、美術、各ジャンルの作家たちが異なる表現を横断する関連イベントが行われました。14日の参加型ギャラリーツアー「まえばしポートレート」では、学芸員の作品解説にはじ



まり、後半は展覧会場からはみ出して、現代詩のユニットTOLTAが案内役。絵画のかかっていない壁の前で萩原朔太郎が前橋に縁のある詩人の詩を聞いたり、ロボットと女性の噛み合わないやりとりを見たり、手渡された冊子にある言葉を手がかりに館内を歩いたり。いずれも目に見えないものを、音や言葉をたよりに、参加者それぞれが自分で描き出すような体験です。自由に想像力をはたかせて作品と戯れる、芸術鑑賞の楽しさを教えてくれる催しでした。

18.2013年に行われたプライベートのワークショップ「絵画×音楽」を通じて生まれた、野村誠作曲《ピアノのための9つの小品「アーツ前橋」》も初公開。絵画からイメージした音をもとに作られた曲をヘッドフォンで聴きながら、その絵画を鑑賞。

19.2月14日に行われた参加型ギャラリーツアー「まえばしポートレート」の様子。

3月21日(土・祝)▷6月7日(日)

Art Meets 02 大西伸明/相川勝

3月21日(土・祝)▷6月7日(日)

小泉明郎 捕われた声は静寂の夢を見る

6月18日(木)▷7月26日(日)

新収蔵作品展示

8月1日(土)▷9月23日(水・祝)

コレクション+

8月1日(土)▷9月6日(日)

花燃ゆ特別展/萩焼展(仮)

アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16
TEL:027-230-1144 / FAX:027-232-2016

www.artsmaebashi.jp

ROBSON COFFEE ARTS MAEBASHI [ロブソンコーヒー アーツ前橋]

営業時間 10:30~20:30(金土は22:00まで)

定休日 水・年末年始

TEL 027-233-3005

ミュージアムショップmina(ミーナ)

営業時間 11:00~19:00

定休日 水・年末年始

TEL 027-289-8094